

昭和40年代のリンゴ輸出の特徴は、東南アジアなど発展途上国が主たるマーケットであることから、国内消費に回らない中級品の国光、紅玉などの小玉リンゴを充てたことだ。

## 5万トン時代へ 青森リンゴ輸出

9

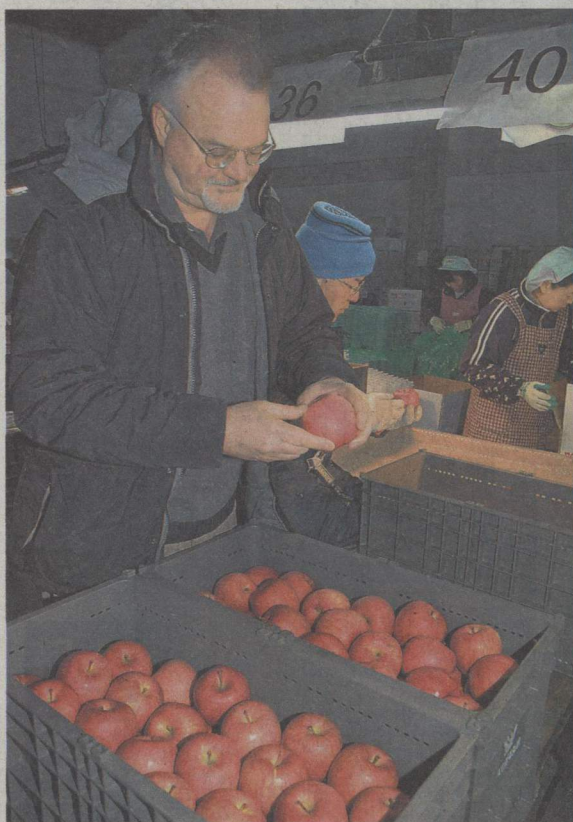
しかし、昭和40年代前半に中国産の台頭で、それまでの中級品小玉リンゴでは競争力がなくなってきたことや、輸出先の経済事情の悪化があつて急速に縮小していく。この背景には、高度経済成長(1956〜73年)に伴って国内向けリンゴの高級化路線が軌道に乗り、輸出

に頼らなくても十分なマーケットが確保できたことや、加工産業の充実で小玉のマーケットができたことが挙げられる。ただ、この間も1968年にフィリピンに1万ト、71年からスウェーデンなど北欧に最大180

ト、その後も中近東にスターキング3千トを輸出するなど、新規市場開拓の取り組みは怠らなかつた。平成に入ると、アメリカ、ニュージーランド(NZ)、オーストラリアから日本に対してリンゴ輸入を解禁するよう要請が

# 検疫措置緩和をけん制

相次いだ。リンゴは1971年に輸入自由化されているが、植物防疫法の規定により、日本で未発生の病害虫発生地域からの輸入を禁止している。しかし、解禁要請を行つた3カ国では禁止病害虫の完全防除技術が確立したとして、93年から順次輸入が解禁されてい



弘前市で米国向け輸出用リンゴを検査する米国農務省の植物検疫官—2005年1月

る。ただし、輸入に際しては日本が課しているのと同様の検疫措置を取ることが前提となつた。本県の農業団体は、3カ国が検疫措置の緩和や撤廃を持ち出さないようけん制するため、ニュージーランドとアメリカにリンゴを輸出した。量的にはアメリカに34万6千ト(95年から15年間)、ニュージーランドに3千ト(94年から7年間)とわずかだった。両国への輸出は2010年を最後に一定の役割を果たしたとして休止している。

一方、アメリカ、ニュージーランド、オーストラリアからの輸入は検疫措置が高いハードルとなり、拡大することはなかつた。

(県りんご輸出協会事務局長 深澤守)